

[芸術教育記録]

2015年度パフォーミング・アーツ学科一年次研修報告

2015 Report on the Performing Arts Field Trip Seminar for First Year Students

小佐野 圭 平高典子

Kei Osano and Noriko Hirataka

1. はじめに

パフォーミング・アーツ学科では、例年秋に、1年生全員に対し、宿泊を伴う一年次研修を行っており、2015年度も9月に実施した。主な内容は、初日は「狂言」観劇とバックステージ・ツアー、卒業生による室内楽演奏会の鑑賞である。これらの体験を通じて、パフォーミング・アーツがどのようなものであるかを考えるきっかけを得ることをねらいとする。2日目には、学修や学生生活への意識を高めるため、学生生活に関わるDVD鑑賞、講話、研修行事についてのレポート作成を行った。

文中、敬称は省略する。

2. 研修概要

2.1 到達目標

上演芸術を実際に体験することにより、パフォーミング・アーツが「表現者と観客の生の交流によって創造される一期一会の世界であり、舞台に関わる芸術行為には様々なジャンルがあり、その表現方法も様々であることを理解する。演劇・音楽・舞踊を通じて、創造性という芸術の本質を追究」しようとする意欲を持つ（玉川大学平成28年度入学者用講義要覧—芸術学部パフォーミング・アーツ学科科目群「パフォーミング・アーツ概論」）。

2.2 目的

1. 本物の能楽堂で、プロによる狂言を観劇し、実際の能舞台に立ち、舞台裏を見学することによって、伝統芸能の世界を体験する。

2. 学科卒業生による演奏会の鑑賞によって、室内楽という西洋音楽の形態に触れる。
3. 1と2を通じ、パフォーマンス・アーツとはどのようなものかについて理解を深める。
4. 学生生活に関するDVDの鑑賞や教員の講話を通して、よりよい大学生活を送るためにはどうしたらよいかを考える。
5. 小レポートの作成により、自分の考えをまとめる。
6. 同じ学科で共に学ぶ仲間との交流を深める。

2.3 実施概要

日 時：平成27年9月14日（月）～15日（火）

場 所：横浜能楽堂、ローズホテル横浜2階ザ・グランドローズボールルーム

宿 泊：ローズホテル横浜

参加者：平成27年度パフォーマンス・アーツ学科1年生146名中143名、2名は理由書を事前に主任提出済み。当日欠席は1名（急病のため）。

引率教員および助手：8名

小佐野圭、太宰久夫、松村悠実子（14日のみ）

馬場眞二（1年担任）、平高典子（1年担任）、松川儒（1年担任）

畦地香苗（助手）、都甲英里（助手）

2.4 実施内容

14日は横浜能楽堂で、狂言師5名による狂言を観劇する。その後、出演者の説明を受けながら、バックステージ・ツアー（実際の能舞台にも乗る）を行う。夜は、パフォーマンス・アーツ学科の卒業生による室内楽演奏会を鑑賞する。

15日は、大学生活に潜むカルトの危険性に関するDVDを鑑賞する。太宰による講話のあと、研修行事の内容と感想をレポートにまとめる。

I 狂言

日 時：平成27年9月14日（月）開演13：20 場所：横浜能楽堂

出 演：「附子」 太郎冠者：茂山逸平、主：井口竜也、次郎冠者：茂山童司、後見：茂山あきら
「濯ぎ川」 男：茂山あきら、女房：茂山童司、姑：丸石やすし、後見：井口竜也

プログラム：

- 1 はじめに（太宰久夫）
- 2 解説（茂山あきら）
- 3 「附子」
- 休憩（10分）
- 4 「濯ぎ川」
- 5 バックステージ・ツアー

II ミニ・コンサート

日 時：平成27年9月14日（月） 開 演：20：00

場 所：ローズホテル横浜ザ・グランドローズボールルーム

出 演：佐藤佳織（ピアノ）、本田早紀（ファゴット）、松本沙織（サクソフォン）

プログラム：

- 1 ファゴット独奏（本田、佐藤）
 アヴェ・マリア /C. グノー
 アンダンテとハンガリー風ロンド /C. M. v. ウェーバー
 - 2 ピアノ独奏（佐藤）
 ノクターン第2番 変ホ長調 op. 9-2/F. ショパン
 - 3 サクソフォン独奏（松本、佐藤）
 ブラボー・サククス！ /星野尚志
 サクソフォン協奏曲第1楽章 /L.E. ラーション
 - 4 トリオ（佐藤、本田、松本）
 ニュー・シネマ・パラダイス /E. モリコーネ
- アンコール（佐藤、本田、松本）
 レ・ミゼラブルより「夢やぶれて」 /C-M. Schönberg

Ⅲ 学生生活に関するDVD鑑賞

日 時：平成27年9月15日（火） 開 始：9：30

場 所：ローズホテル横浜ザ・グランドローズボールルーム

使用DVD：「カルト～すぐそばにある危機！～」(2015年) 日本脱カルト協会制作

2.5 スケジュール

日付	時間	場所	内容
9月14日（月）	13：00	横浜能楽堂	横浜能楽堂集合
	13：20		狂言観劇 バックステージ・ツアー
	17：00		終了後、各自ホテルへ移動
	17：30	ローズホテル横浜	ローズホテル横浜集合
	18：30		夕食
	20：00		ミニ・コンサート鑑賞 出演者へのインタビュー / 質疑応答
	22：00		ミニ・コンサート終了
9月15日（火）	7：30	ローズホテル横浜	朝食
	9：30		学生生活に関するDVD鑑賞 講話（太宰） レポート作成、回収
	11：30		解散

3. 学生によるレポート

最後に、狂言、ミニ・コンサート、DVD鑑賞、研修全体などから2テーマと、自分の夢について、レポートを作成した。その内容を一部原文のまま抜粋する。

3.1 狂言観劇について

◇狂言を観劇したのは高校の修学旅行以来でした。自分から伝統芸能を観ることがなかったので、今回の狂言観劇はとても楽しかったです。「附子」は昔、本で読んだことがあったので知っていましたが、こうして演じているのを観ると、本とはまた違った面白さがあるとわかりました。途中は笑いすぎて涙が出るほどでした。「濯ぎ川」はあらすじを見て「面白いのかな」と不安になりましたが、いざ観劇するととても面白かったです。落語や能、歌舞伎も機会があれば観たいと思いました。

◇中学生の頃、学校行事で能を見たのですが、当時は能や狂言の違いがわからないくらい知識もなく関心もなかったので鑑賞中に居眠りをしてしまったことから、今回の研修でも公演の途中で寝てしまわないかと心配していました。しかし、法月先生の「日本演劇・舞踊史」を春 semester で受講していたため、狂言や能についての基本的知識が頭に入っていたので授業で習ったこと（例えば能楽堂は屋内での公演ですが、かつては屋外の公演だったため屋根があり、脇には屋外を再現するための砂があることなど）を実際に見て確認することができました。また、新たに学んだことがたくさんありました。例えば、「口伝」という言葉の漢字でわかる通り、口で昔からあるものや習慣や決まりごとなどを後世に伝えるという意味で能や狂言は口伝のおかげで、現代にも残っているということ学びました。また、実際に演目を見ることで、セリフの中で聞いたことのない昔の言い方をする単語があっても、前後のセリフから意味を読み取ることができたのが、嬉しかったです。今度、「わわしい（うるさい）」という言葉にクイズを出してみようと思いました。また、バックヤードツアーで舞台や楽屋に行かせてもらえた経験はとても貴重だと思いました。何より演目が面白くてあつという間でした。

◇春学期に受講していた「演劇理論」や「日本演劇・舞踊史」の授業中に狂言の舞台のビデオを何度か鑑賞したことはあった。しかし、自分の足で劇場に行き、生で狂言を観劇したのは今回が初めてだった。始まる前にいただいたプログラムの中にあらすじが書いてありそれを読んだだけでも「面白そう」と思える作品だった。実際、舞台が始まったら役者さんの演技に圧倒された。掛け合いのテンポが非常によく、観ててまったく飽きないむしろ楽しかった。素人の私でも理解し、大笑いできるぐらい、とても見やすい作品だった。

◇私は今回のPA学科研修を通して初めて生で狂言を観劇しました。観劇する前までは狂言がこれほど面白いものだということが知りませんでした。我が国の伝統芸能（能や狂言等）についての知識がなかったことにあらためて気づかされました。今回の観劇は通常は入ることができない舞台の裏側の部分を見学させていただき、狂言における舞台用語や、何のために松が描かれているのか、疑問に思っていたことも知ることができました。昔からあまり変わっていない日本の伝統芸能に触れることができ、とても素晴らしい体験をすることができました。今回の研修では自分の視野を広げることができたのでこれから、この経験を自分の芸術活動に生かしていきたいです。

3.2 ミニ・コンサート鑑賞について

◇ミニコンサートではプロフィール欄を見て「どんなすごい先輩だろう」と、とても楽しみにしていました。ファゴットの音は聴いていて、柔らかい心地がしました。独奏はピアノくらいしか聴いたことがなかったので、ファゴット、サクスの独奏を聴くことができるととても嬉しかったです。サクスはジャズで使われる音楽ばかり聴いていたのでクラシック音楽のサクスの、また新しい一面を見たような気がしました。先輩たちが演奏している姿はとても綺麗でかっこよかったです。私も先輩がたのようになりたいと思いました。

◇ミニコンサートでのピアノソロのショパンのノクターンの優しい音色が耳に残っている。とても柔

らかに女性らしい音を出す方だった。

3.3 学生生活に関するDVD鑑賞について

◇カルト教団というあまり良いイメージがなく、こちらに引越してからはいいのですが、実家にはよく来ていました。今は、1人なので守ってくれる人もいないので、とにかく信用できる人に相談することが大切であり、断る勇気もしっかり持たなくてはならないと思います。

3.4 講話（太宰）について

これはレポートのテーマとしては設けなかったが、研修全体についての記述の中で多くの学生が言及していたので、ここに一部抜き出して掲載する。

◇今回の新入生特別研修では太宰先生のお話が印象に残っている。私は今まで大学の4年間でやりたいことを明確にし、将来の夢に向かって勉学に励めばよいと考えていた。しかし、それでは遅いという話を聞き冷静に周りを見てみると、既に日本舞踊の稽古に励んでいる者や、オーディションに応募し企業に自分を売り込んでいる者がいることに気づいた。今から始めるのと卒業直前に決めるのでは単純に考えて大変、差がついてしまう。なるほど、確かにそれでは遅すぎるし、何より時間ももったいないと感じた。今年の夏休みは私もいくつかの企業のオーディションに応募し挑戦していたものの、まだ、精進が必要であると痛感させられる話であった。

◇太宰先生がおっしゃっていた悩まずやってみること、よい交友関係を作ることは私自身も大学に入ると決めた時に大切にしようと思っていたことなので、さらに自信ができました。表現の世界はなりたい人の数と実際に仕事ができる人の差が大きく自分の夢を追いかけることをあきらめたり、自分がこのままでいいのか悩んだりする人が多いように感じます。私はそうした時間ももったいないと思うのでとにかくがむしゃらに、できることをやっていきたいです。大学に入って芸術を学ぶことで表現を説明する力を身につけることができるというのは先生がおっしゃるように後で大切になってくると思いました。表現の世界で長く仕事をしていくには自分をマネジメントしていく力、表現を言葉にして表せる力が確実に求められると思いました。

◇太宰先生の話聞いて迷ったり悩んだりするくらいなら行動を起こして突き進む大事さを教えていただきました。

3.5 研修全体について

◇一言で表すと、本当に参加してよかった。初めての狂言鑑賞、卒業された先輩方のミニコンサート。大学で新しく出会った友人との宿泊行事。たった1泊2日だったが、ずうっと充実していた。ちょうど日付が変わる頃、友人と将来について語り合った。久々に自分の思っていることをストレートに相手にぶつけた。悩んでいるのは皆、同じなんだとわかった。私は私なりにやりたいことに向かって今の自分にできることを精一杯こなしていく。

◇今回の研修は「横浜市民が市内に泊まるって面白いな」と思っていました。友人たちと泊まったことがなかったので、とても楽しかったです。知らないクラスメイトとも何人も仲良くなることができて研修をやってよかったです。

◇狂言、楽器演奏、演技と2日間で様々な芸術、芸能に触れ、どれも素敵に思えたり興味がわきました。どの方々もやりたいことにひたむきで、今、いろいろ迷っている私にとっては尊敬する方々でした。この2日間、とても得るものが多かったので忘れずに常に胸にとどめておき自らの将来に生かせるようになりたいです。なります。

◇自分の意志だけでは狂言を見に行こう、吹奏楽のコンサートに行こう、などとは思わないので今回の研修があってよかった。そして今回の研修のおかげで芸術についてより興味を持てたと思う。あと3年半、一緒にやっていくであろうPA学科の仲間とこういう経験ができてよかった。

4. 研修報告

学生のレポートによると、本研修の6つの目的（前述2.2）はある程度達成できたと考えられる。

特に、〔目的1〕の狂言では、日本を代表する狂言師集団の迫力あるステージに強いインパクトを受けた学生が多かった。ほとんどの学生にとって初めての狂言であったが、演者側が、初心者にわかりやすい演目を選び、また現代の学生に合うように演じ方を工夫していたことも、学生が楽しんで鑑賞できた大きな理由であろう。学生の多くが、古典芸能は退屈であるとか難解であるというような先入観を持っていたが、今回の上演には親しめた、と書いている。実際上演中たびたび笑いが起こり、学生が理解しながら鑑賞しているようすがうかがえた。彼らの心理的なハードルを下げ、興味を持たせる効果は大いにあったと言える。春学期の授業で狂言の基礎的な知識を得ていた一部の学生にとっては、学んだことを実地で体験できる機会となった。

同様に〔目的2〕のミニ・コンサートでも、出演者は、クラシックの中でも聞きやすい曲を選び、さらにクラシックだけでなくミュージカルや映画の主題歌などの編曲も取り入れて、学生に、室内楽が、多彩で親しみやすいものであることをアピールした。

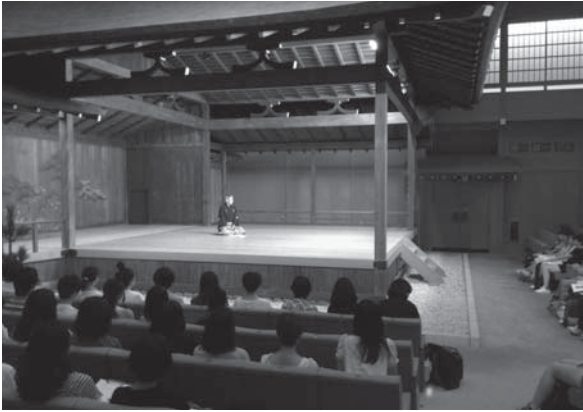
このように、普段はなかなか接することのできない上演芸術に身近に触れたことは、パフォーマンス・アーツに対するイメージをつかむきっかけになったと思われる〔目的3〕。

〔目的4〕についても、研修全体や、特に太宰による講話を通して、今後の大学生活にどのような意識を持って臨むべきかを考えるようになったという記述も多く見られた。視野を広く持つこと、まずは実際に行動してみる、などのアドバイスが印象に残ったようである。また、ミニ・コンサートの出演者や鑑賞したDVDの登場人物の一人は本学科の卒業生であり、同じ学科の先輩がこのように芸術家としてレベルの高いパフォーマンスをしているようすを見て、刺激を受けた学生もいた。

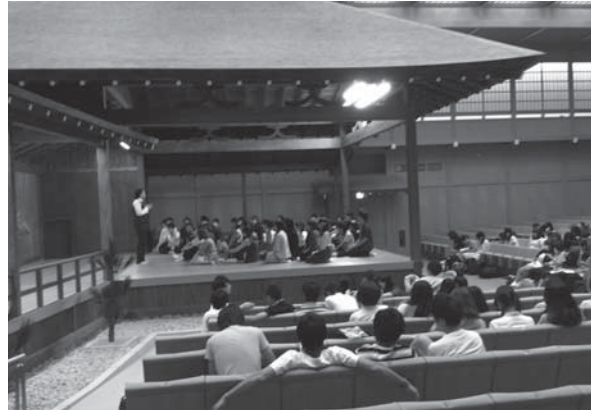
レポートの作成には、文章化という作業を通して、体験が深化し定着する効果がある。レポートからは、学生が、研修の内容や印象、自分の考えや夢をまとめることによって、自分が相対している、あるいは将来相対するであろう問題を自覚し、今後の学修への姿勢をどうすべきか、意識して考えようとするようすがうかがわれる〔目的5〕。ただ、筆記に与えられた時間が3分と短かった点は、今後改善すべきである。

親睦という点でも、多くの学生が効果を感じている〔目的6〕。

全体として、この研修は、学生の見聞を広げるだけでなく、自分の学修や学生生活のありかたを意識させる効果があったと言えよう。パフォーマンス・アーツに対する認識が芽生え、パフォーマンス・アーツと真剣に対峙しようとする姿勢が生れる契機が、本研修によって与えられたと考えられる。



解説 (茂山あきら)



バックステージ・ツアーで舞台に上がる



卒業生によるミニ・コンサート



講話 (太宰)